

平成30年度 環日本海文化交流史調査研究集会の記録

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが主催する環日本海文化交流史調査研究集会は、平成12年度から継続して日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、各地域の研究者と調査・研究を行い、交流を図ってきたもので、平成30年度は第19回目の開催となった。

今年度のテーマは、昨年度の「近世成立期の土器・陶磁器様相—カワラケを中心に—」に続くものであり、今回は県内外の考古学研究者や大学生等が参加しやすいよう、土曜日に開催し、会場を市内中心部にある石川県立歴史博物館とした。その結果、市町の埋蔵文化財担当者等の参加も例年より多く、約80人の参加を得て盛況な調査研究集会となった。

当日配布した資料集は170頁に及ぶもので、北陸の講師の内容は昨年度の資料がより深化したものとなり、新たに京都と江戸の資料が加わり、胎土分析の成果も掲載した。特に附図として①土師器皿②瀬戸・美濃、貿易陶磁他③肥前、越中瀬戸④焼締陶器の4種類に分けた編年案を提示した。なお、この資料集は当センターホームページに掲載しているので、参照されたい。また、当日の討論において時間の制約から言及できなかった検討課題については、本誌P15～28を参照願いたい。

当日は会場後方に各地域から持ち寄った土師器皿を展示し、資料集に掲載された土器を観察する機会を設けた。これだけの地域の土師器皿を一同に見る機会は滅多にないので、多くの参加者が各地域の特徴などを見比べていた。講師の皆様には遠路にも拘わらず貴重な遺物をお持ちいただきまして感謝いたします。

(立原 秀明)

当日資料集目次

『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相—城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に—』

京 都	森島康雄「京都」京都府立丹後郷土資料館	1
福井①	阿部 来「越前における15世紀後半～16世紀中葉の土器・陶磁器」勝山市教育委員会	15
福井②	中原義史「福井城跡の土師器皿—16世紀末～17世紀—」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	29
富 山	堀内大介「越中における近世成立期の土師器皿の諸様相—富山城跡出土資料から—」富山市埋蔵文化財センター	43
石川①	岩瀬由美「加賀・能登における15世紀後半～17世紀の土器・陶磁器様相」公益財団法人石川県埋蔵文化財センター	71
石川②	滝川重徳「金沢城跡・金沢城下の遺跡における土師器皿と陶磁器の様相—16世紀後半～17世紀後半」石川県金沢城調査研究所	103
江 戸	水本和美「江戸の陶磁器・土器の様相」東京藝術大学大学院	127
胎土分析	長佐古真也、西本右子・丸山毅真「近世初期土師器皿の生産地推定（速報）～非破壊元素分析のポテンシャル～」公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター、神奈川大学	163

附図1 土師器皿編年案

附図2 瀬戸・美濃、貿易陶磁他編年案

附図3 肥前、越中瀬戸編年案

附図4 焼締陶器他編年案



講師 1



講師 2



会場の様子



各地域の土師器皿

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・播鉢を中心に－	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前磁器から探る－	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相－カワラケを中心に－	第39号
第19回	H31.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相－城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に－	本号（第41号）

土師器皿(かわらけ)は語る

—平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会の成果から—

藤田邦雄

1. はじめに

今回の研究集会のテーマは「北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相—城下町とその周辺遺跡の土師器皿(かわらけ)を中心に—」である。北陸において恒常的に出土が認められる土師器皿の編年観については、今までは資料的な制約もあり中世と近世それぞれの側で語られることが多く、そのためどうしても中世末から近世にかけての様相が不鮮明であった。平成22年(2010)の同研究集会では、肥前陶磁からみた16世紀末以降の流通をテーマに近世の画期を探った⁽¹⁾が、今回は近年の福井、金沢、富山各城下等からの資料の蓄積を受け、土師器皿の分類と編年を軸とした上記テーマを設定した。

対象時期については、北陸の共通項として京都系土師器皿の消長が追える15世紀後半～17世紀代とし、地域的には福井(越前)、石川(加賀・能登)、富山(越中)の北陸3県に、平安時代末以降北陸をはじめとした列島各地に少なからぬ影響を与え続けている京都と逆にロクロ土師器のイメージが強く北陸との関わりが顕著ではない東国江戸を加え比較対照とした。また、土師器皿と共伴する各種陶磁器類(主に瀬戸・美濃、貿易陶磁、肥前陶磁、越中瀬戸、越前・珠洲等の焼締陶器)についても取り上げ、統一政権誕生前後における土器・陶磁器組成の変遷及び地域性等から導き出される時代の画期を追った。さらに、非破壊での機器分析による土師器皿の生産地推定も試みられ、非常に興味深い可能性が示されている。

ここでは、今回の研究集会で報告された最新の研究成果を振り返りながら、当日の“討論”の場で言及できなかったいくつかの検討課題について若干の整理をしてみたい。

2. 京都の様相

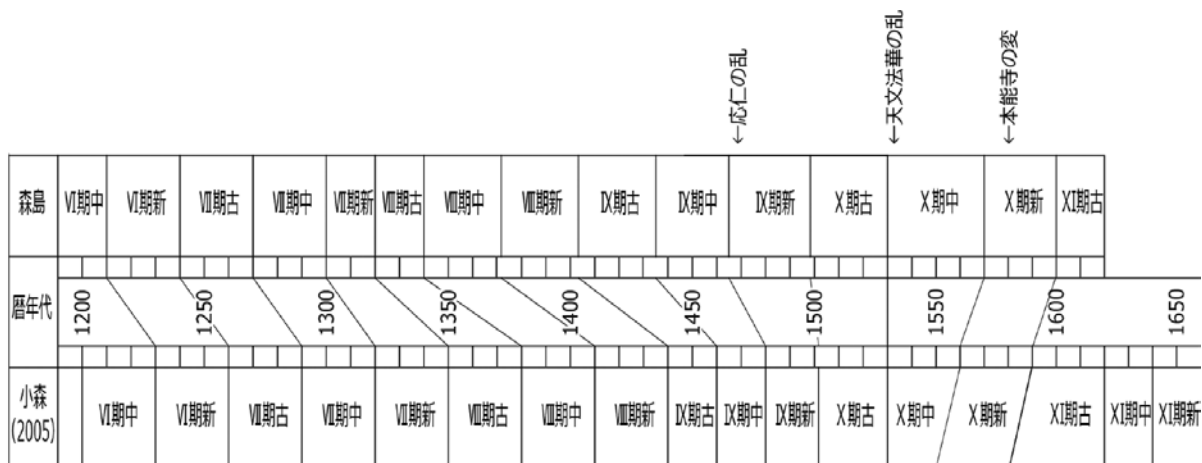
今回の資料作りの中で、北陸における京都系土師器皿の動向を一つの共通軸とした以上、まず確認すべきは京都の様相である(P1～14[HP収録⁽²⁾の研究集会当日資料集引用頁:以下同じ])。

京都の土器編年は、1980年代初頭に同志社・烏丸線・内膳町等の各編年案が示されることで骨格ができ上がり、現在では、烏丸線編年を基礎とした小森・上村編年が事実上の基準として採用⁽³⁾されている。その編年は8世紀後半～19世紀末頃までをI期～XIV期に区分し、各期をそれぞれ古・中・新の3段階に区分(第1図)するものであって、相対的編年については大方の理解は得られているものの、暦年代については根拠となる資料に乏しいこともあり、共通認識ができていない現状にある(P1)。

750頃			840頃			930頃			1010頃			1080～90頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～90頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃		
I			II			III			IV			V			VI			VII			VIII			IX			X			XI			XII			XIII			XIV		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新			

第1図 京都基準編年(小森・上村編年)

森島はこのようにして、現在の京都基準編年への疑義を示し、天文法華の乱に伴う被災資料の暦年代観については、1530年頃との認識で一致するが、そこを境とした13～15世紀については、平安京跡で出土する瓦器鉢・東播系須恵器鉢・大和産羽釜などと京都の土師器皿の年代観が合わないとして基準編年より引き上げ、16世紀後半については、織豊期城郭の瓦研究の成果などから全体に引き下げる年代観を提示(第2図)している。



第2図 京都基準編年と森島編年の年代観比較

では、森島の報文にそって土師器皿の変遷を具体的にみてみよう。編年図は大きく、皿S（白土器）と皿N（赤土器）にわかれる（第3図）が、我々が一般的に京都系としてイメージしているタイプは、その生産地が木野・幡枝などの洛北と推定されている皿S（Sh）の方である。

15世紀後半（IX期中～新）で皿Sは前期に比べ厚手となり、器形は口縁部が伸びて外反、低平化する方向に変化する。法量分化はさらに進むが、口径12.0～12.5cm、器高2.5cm程度のものが最も多い。口縁部内側のナデの下端には水で垂れた粘土が溜まり、わずかな凸線状に底部周縁をめぐる。小皿Shは大半がへそ皿で、底部を押し上げた際にできる爪の圧痕がへその中に認められる。








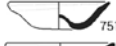







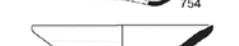
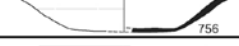
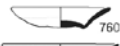
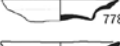
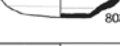
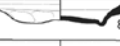





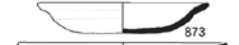
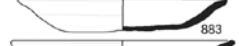




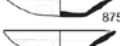








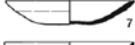



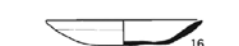
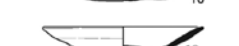
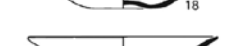



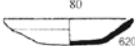

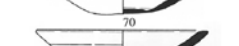
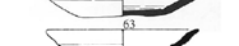

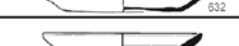







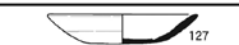

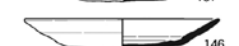









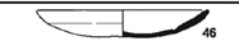
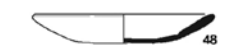

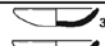





16世紀（X期）には皿Sの大皿はさらに低平化が進み、口縁部が短くなって口径は縮小化する方向にある。16世紀中葉（X期中）では底部が平らになり、内底面の圈線の凹線化が明確になるとともに、ナデの最後を逆方向にナデ抜くもの（「2」字状ナデ）が目立つようになる。口縁端部は内傾する端面をもつようになり、16世紀後半（X期新）ではやや肥厚して尖り気味に納めるものが多く、16世紀末には短く直線的になる。へそ皿は低平化が進み器高1.5cm程度となり、X期中にはほとんどみられなくなる。代わって口縁部にナデ調整がみられない皿Nrが現れる。

17世紀前半～中葉（XI期）には皿Sの大皿底部は再び丸みを帯びるようになり、口縁部は短くなって低平化が進む。内底面周縁の凹線状の圈線は明瞭で、17世紀中葉（XI期新）にはヘラ状工具で装飾的に施したものが現れる。

さて、こうした15世紀後半～17世紀の皿S及び皿Shの変遷をいくつかの要素に着目してたどると、

- ① 器形：順次低平化が進行
- ② 口縁部：伸びて外反→短く口径は縮小化→端部内傾化→肥厚して尖り気味→短く直線的
- ③ 底周縁：わずかな凸線状→やや凹んだ圈線→凹線状に明確化→圈線明瞭→ヘラ圈線
- ④ ナデ：圈線の凹線化とともに、進行逆方向へのナデ抜き（「2」字状ナデ）目立つ
- ⑤ 皿Sh：大半へそ皿→へそ皿低平化、消失→皿Nr出現

といった流れがみてとれる。おそらくこのような京都産土師器皿の構成要素が様々な過程で複雑に入り交じり、各地の京都系土師器皿を形作っているものと思われるが、その背景を読み解くことは難しい。そのためここでは、主に現象面からみた各地の状況についてみていくこととなる。なお、該期における森島編年の画期は、1500年頃（IX/X期）、1600年頃（X/XI期）、1660頃（XI/XII期）に設定されている。

年代	区分	土師器皿				
	年代	ⅢSh	ⅢS		ⅢN	ⅢNr
1450	IX中	 721 L4・2・14 SK2091	 726	 727  743	 747	
	IX新	 749  750  751  752 L4・2・14 SK0036 SE0922	 807  808  809  810  811	 754  755  756	 760  778  803  804  783	
1500	X古	 868  869 L4・2・14 SK2185	 870  871	 873  883  903  904  906	 874  875  877  878  880  882	
	X中	 3  4  5 L4・1・12・13 SD115	 6  7  8	 13  14  16  18  20		 1  2
1600	X新	 80  620 本能寺SK52 内膳町SD164	 623  70  63  626  632			
	XI古	 3 L3・3・9 1区堀状遺構	 4  5			 1  2
	XI中	 120  121 公家町遺跡 土坑200	 127  137  146			 114  115  116
	XI新	 143 上京遺跡 土坑222	 145  146			
1650	XII古	 42  43  44 L3・4・10 SE7	 46  48  49			 39  40  41
	XII中	 177 公家町遺跡 土坑129	 180			
1700						

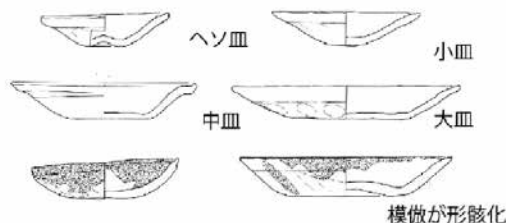
第3図 京都土師器皿編年案（森島編年）

3. 京都系土師器皿の消長

(1) 出現

何をもって「京都系」とするか。中世後半期における京都系土師器皿の概念形態は、模倣の対象となった京都の皿 S に近いものと考えるが、岩瀬の分類（第4図・P78）によれば、

- * 体部は緩やかに開き、口縁端部をつまみ上げる。
- * または端部内面にヨコナデによる面を形成し、外面は口縁部付近のみをヨコナデする。
- * 内底面に凸圈線や凹線が観察される個体がある。
- * 内面調整は小型品に「の」字状ナデ、中型品以上に「2」字状ナデを施すものがある。
- * 小、中、大、特大の法量がみられる。
- * 小皿にはへそ皿を含む。
- * 模倣が形骸化したものがみられる。

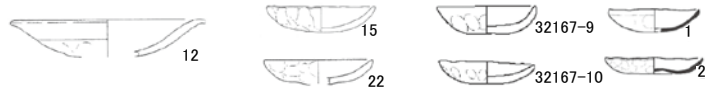


第4図 土師器皿器形分類 (B類 京都系)

とあり、ここにほぼ大方の京都系土師器皿の要素が集約されているように思われる。

さて、おおよそ15世紀後半以降とされる北陸での京都系土師器皿の定量出土について、今回の報告では大きな変更点はなかったように思われるが⁽⁴⁾、阿部は京都の伊野編年 G タイプ⁽⁵⁾・中井編年皿 H⁽⁶⁾ との対比の中で、「深手で丸みを帯びた底部から開き気味に緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する」B1類を設定（第5図・P15）し、京都産土師器皿の模倣として15世紀初頭頃からの出現を予想⁽⁷⁾している。また、今回在地系の A3類に含めてはいるものの「口縁部の横ナデが不明瞭」な小皿類（第6図・P23）及び中原がヒジ成形の可能性を指摘し「手づくねでナデ調整無し。小型品のみで、不整形のものが多い」とする D 類

（第7図・P33）については、出現時期が16世紀後半以降とする年代観も含め森島編年の皿 Nr（第8図）に近く、今後の検証が必要となろう。



第5図 B1類

第6図 A3類

第7図 D類



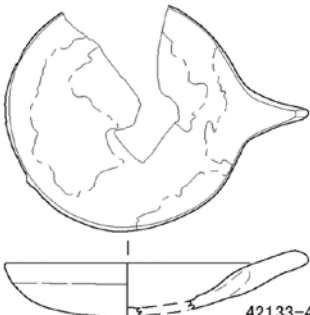


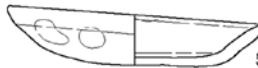







第8図 皿Nr

北陸の中世後半期における京都系土師器皿の出現は、森島編年皿 S（ちなみに伊野編年 I タイプ、中井編年皿 K）の模倣を軸として越前、加賀、能登、越中ともに15世紀後半頃に位置づけられ、その後独自の変化を遂げていくことになる。ただし、その内の越前においては多少様相が異なり、タイプの異なる京都産土師器皿の模倣がそれ以前から行われ、また、16世紀後半以降の小皿類についても別系譜の京都模倣を試みていた可能性がある。

(2) 変遷と衰退

では、そうした京都系土師器皿は各地でどのような変遷をたどるのであろうか。


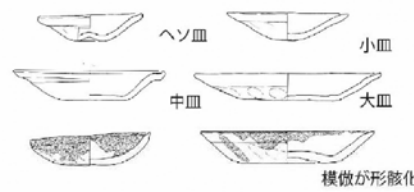
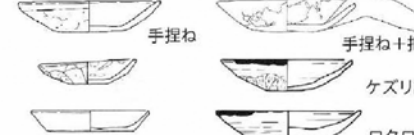
越前では16世紀前葉で在地系の衰退と京都系への集約化が進み、大型品（阿部B2類）は、凹圈線の明確化や器壁の厚手化のほか、口縁端部の鋭いつまみ上げが徐々に鈍化し方頭状になるといった型式変化⁽⁸⁾をたどる。その集約化の流れは福井城 I 期(1575年(北庄城築城)～17世紀前葉)まで受け継がれる(第9図中原B類)が、一乗谷朝倉氏遺跡では一般的な「2」字状ナデが福井城跡ではみられない等の差異も観察(P29)されている。続く福井城 II 期(17世紀中葉～1669年(寛文9年大火))・III 期(1669年～18世紀前葉)では再び在地系の土師器皿(R・G・H・K類)が加わるものの量的には少ない。結局16世紀からの系譜を引く京都系B類が福井城跡の中で出土量を減らしていくのは18世紀後半以降とされ、器形別ではBa1類、Bb1類(I 期)からBa2・3類、Bb2類(III 期)への量的推移が認められる。

B類	Ba類	見込みと立ち上がりの境がBb類に比べて不明瞭。 内面に回しナデを行う。		16世紀後葉～
		1 見込み中心付近から回しナデを行う。	 32187-4	(持ち手付き のものは17世 紀中葉～)
		2 見込みの途中から回しナデを行う。	 32187-8  42133-41	
		3 立ち上がりのみに回しナデを行う。	 32127-8	
	Bb類	見込みと立ち上がりの境がBa類に比べて明瞭。 見込み端から回しナデを行う。		16世紀後葉～
		1 境が明瞭で、圏線状になる。	 32187-2	
		2 境がやや不明瞭で圏線状の表現が弱いもの。	 54109-6	
		3 立ち上がりが大きく外反し器高が低いもの。	 36076-38	
D類		手づくねでナデ調整無し。 小型品のみで、不整形のものが多い。	 32167-10	16世紀後葉～
G類		型成形	 3134上-26	17世紀後葉～
H類		G系に形が似るが手づくねによるもの。	 36141-6	17世紀後葉～
K類		立ち上がりを指で挟んで、同じ深さまで挟みナデ を行う。	 3134上-32	17世紀後葉～
R類		ロクロ成形	 32127-12 	17世紀中葉～

第9図 福井城跡土師器皿器形分類（中原分類）

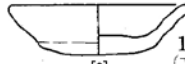
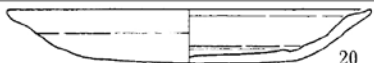
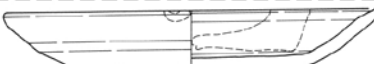



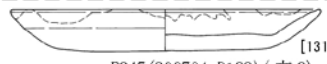

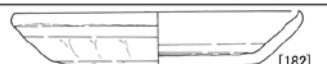


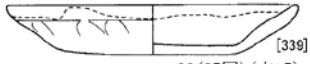


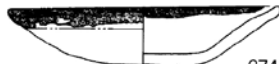
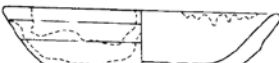

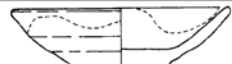
加賀、能登ともにA類(在地系)、B類(京都系)、C類(A・B類以外)として分類(第10図・P78)する。加賀では越前の動向と異なり、在地系A類はB類出現以降も特に衰退することなく17世紀前半にかけて共伴関係が認められる。B類の大皿タイプについては、口径が大きく薄手の深身で体部の開き大きいことを特徴とし、時期が下がるにつれて口径が縮小し器壁がやや厚く浅い器形となり、体部の開きが弱くなる。調整をみると16世紀前半で内底面に凸圈線、17世紀前半で凹線が観察されるが、こうした京都系B類の系譜が追えるのは17世紀前半までで、入れ替わるようにC類が増加する。

それに対して、能登の在地系A類は16世紀前半頃までは京都系B類との共伴は追えるが、それ以降の出土は非常に稀であり、越前に近い様相がみて取れる。B類小皿のへそ皿は15世紀後半から認められ、京都では16世紀中頃にはほぼみられなくなる(P6)が、能登では退化したものが16世紀末頃まで確認できる。B類大皿は、やはり新しくなるにしたがい口径の縮小、器高の減少、器壁の厚手化、模倣の形骸化等が指摘でき、凸圈線から凹線の顕在化という流れも追える。16世紀末以降になると口縁部をつまんでナデる造作は残すものの体部の立ち上がりは強く、続く17世紀前半までは体部の開きは弱く厚手化が顕著となる。そして今のところ、能登でB類の系譜が追えるのはここまでである。

A 類 在地系	<p>手握ねで、京都系土師器が入る以前から作られているものの系譜を引き、調整などに京都系土師器の影響がみられないもの。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丸底と平底に細分可能 ・平底タイプには体部がまっすぐ立ち上がるものと開くものがある。 	
B 類 京都系	<p>手握ねで、京都の土師器の形態・調整を模倣したもの。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体部は緩やかに開き、口縁端部をつまみ上げる、または端部内面にヨコナデによる面を形成する。外面は口縁部付近のみをヨコナデする。 ・内面調整の結果、内底面に凸圈線や凹線が観察される個体がある。内面調整は小型品に「の」字状ナデ、中型品以上に「2」字状ナデを施すものがある。 ・小・中・大・特大の法量がみられる。小皿にはへそ皿を含む。 ・模倣が形骸化したものがみられる。 	
C 類	<p>在地系でも京都系でもなく系譜の追えないもの全て。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A類にもB類にも属さない手握ね(B類に把手を付けたものを含む)。 ・ロクロ土師器 ・外面にケズリ調整を施すもの 	

第10図 加賀・能登土師器皿器形分類(岩瀬分類)

金沢城跡では今回新たに城下の資料を加え、16世紀後半～17世紀後半を対象としてA類(在地系)、B類(京都系)、C類(京都系の要素が顕著でないもの)に大別(第11図・P109)した。B類の特徴については他地域との共通点も多いが、C類の概念は金沢城跡独自のもの(P103・104)であり、B類と部分的に共通の要素をもつ場合であっても、1610年前後の出現の時点で前代とのつながりが認めにくく、B類の終末前後にのみ認められる一群をC1類、後出的で17世紀前半以後に繋がる系統をC2類とする。C類はそれぞれにより細分され、時間的変遷との対応が試みられている。ちなみにやや複雑にはなるが土師器皿の4段階別変遷をたどると、①Ⅰ・Ⅱ段階(1580～1600年代): B類主体。A類は少量で小型品に限定。②Ⅲ段階(1610年代): C1類主体。B類は急速に減少。③Ⅳ～Ⅶ段階(1620～1650年頃): C2Ⅰ類主体。細分するとⅣ(1620)C2Ⅰ1a類、Ⅴ(1630)C2Ⅰ1a・C2Ⅰ1b類、Ⅵ(1640)C2Ⅰ1b類、Ⅶ(1650)C2Ⅰ3類を主体とし、他のC2類は少数にとどまる。④Ⅷ段階(1660年代～): C2Ⅳ類主体。17世紀後半の主体形態。となる。こうした時間軸の短い段階設定は、現時点ではいくつかの鍵層をもつ金沢城跡とその周辺域に限られるが、土師器皿の主体が京都系B類からC1類→C2類へと短期間のうちに移行する17世紀初頭(1610～20年代)は、城下の環境再編に関わる画期として注目される。

A 在地系 京都系流行以前からの系統を引くもの			 13 (文14 Fig307)		～16C末		
B 京都系			(薄手)	 20 [13] (文14 Fig. 307)	～17C初		
・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部は緩やかに外反、外面ナデ明瞭 ・口縁内面に端面形成 ・内面「の」の字状ナデ (小型品) ・内面見込一方向ナデ→体部ヨコナデ (大型品) (「2」の字状ナデが典型)			(厚手)	 [94] P172(文1)			
C 京都系の要素が顕著でないもの (手づくね成形)	1 京都系と共伴 17世紀初期以後衰退 形状多様、細分の余地大きい	①口縁端部が長く引き伸ばされる	 [121] P143 (200005-D012) (文2)		17C初		
		②口縁部全体が強く外反する	 [118] P231 (200704-D158) (文2)				
		③底部が平坦で、体部がやや短く立ち上がる	 [124] P125 (20005-D010) (文2)				
		④底部が丸みを帯び、内湾気味に立ち上がる	 [131] P247 (200704-D128) (文2)				
		⑤体部が内折れ気味に強く立ち上がり、見込凹線が深く入る	 [101] P185(文1)				
	2 17世紀前半以後へ連続	I ・底部平坦 ・体部立ち上がり急 ・口縁端内屈 ・11⇒13へ変化 ・17世紀前半の主体形態	1 典型	a	 [182] P314 (199804-D073) (文3)	17C初～前半	
				b	 [251] P141(文1)	17C初～前半	
			2 小型、底部小		 P1775(文7)	17C初～前半	
				3 体部外傾		 [339] 22 (97図) (文17)	17C半ば
						 P19(文7)	17C初～前半
		II ・底部丸み帯びる ・口縁強く外反、端部突出 III ・外底部内側に凹む ・体部の立ち上がり・口縁調整、I 1類に類似 IV ・体部外傾、底部小、器厚均一 ・17世紀後半の主体形態			 P017 (200601-D028) (文4)	17C初～前半	
					 [346] 274 (文10)	17C後半	
			その他 ロクロ成形		 [300] 39 (169図) (文17)	17C前半	
			 [319] 30 (89図) (文18)				
					 [325] 9 (189図) (文17)		

* 遺物番号 [] : 今回資料番号 [] 以外 : 報告書掲載番号等

* 遺物番号 [] : 今回資料番号 [] 以外 : 報告書掲載番号等

* 胎土特徴


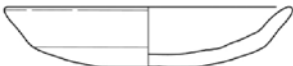
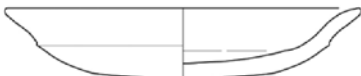
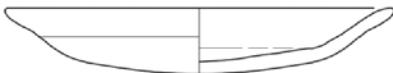
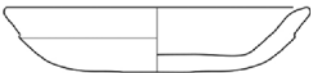



A : 中砂多い、粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ……………B 類の一部 (能登産)
B : 砂粒比較的に少なく、均質 (細分の余地大きい) ……B 類の一部 (加賀産)、C 1 類、C 2 IV 類
C : 砂粒ごく少ない、均質……………B 類の一部 (加賀産)、C 1 類
D : 細砂多い、均質 (粉質) ……B 類の一部 (加賀産)
E 1 : 礫含み、粗砂・細砂多い (含有量の程度差大きい) ……C 2 I・II・III 類
E 2 : 礫無〜微、粗砂・細砂少ない……………C 2 I・II・III 類
(B よりも粒子大きく、素地が粗い。E1 より精良)

* 主体を占める器形

0 10 cm

第11図 金沢城跡・城下土師器器形分類 (滝川分類)

富山城跡ではA・B類(在地系)、C・D類(京都系)として分類(第12図・P43)する。A類は17世紀中頃、B類は15世紀後半までの存続とするが、A類の中には口縁端部のヨコナデ幅やつまみ上げの状況等からみて京都系小・中皿類の混在もみられようか。京都系C類については16世紀になると口縁端部のつまみ上げが増え、後半には口縁部内面に端面をつくるC3類が出現し17世紀を通して確認できる。内底面の圏線については16世紀前半から中頃にかけてみられるが、その後は圏線をもたないものがほとんどとされる。また、17世紀中頃のC3類は金沢城跡で出土する箱型器形(滝川C2Ⅰ類か)に類似するとして金沢の影響を想定し、同様の影響(滝川C2Ⅳ類か)のもと17世紀後半の底部丸底化へつながるものとする。あと越中独自の様相として、17世紀中頃からの越中瀬戸素焼皿(ロクロ成形)の増加(P45)があげられ、18世紀前半以降の富山城下では従来からの土師器皿は大幅に減少し、その大半が越中瀬戸素焼皿で占められるようになる。

非 ロ ク ロ	A類		<ul style="list-style-type: none">・口縁端部に一段のヨコナデを施す・底部は丸底、平底の両者がある	
	B類		<ul style="list-style-type: none">・底部から口縁部が直接外反・底部と口縁部の境にヨコナデによる稜をもつ・底部は平底である	
	C類 (京都系)	1	<ul style="list-style-type: none">・体部が開き気味に立ち上がる・口縁部はヨコナデして外反・ヨコナデの強いもの、弱いものがある・口縁端部は丸く納めるもの、つまみ上げるものがある・細分の余地が大きい	 
		2	<ul style="list-style-type: none">・体部が開き気味に立ち上がる・口縁部はヨコナデして短く外反・ヨコナデの強いもの、弱いものがある	
		3	<ul style="list-style-type: none">・体部が開き気味に立ち上がる・口縁部はヨコナデして外反・口縁部内面に端面形成	(薄手) 
				(厚手) 
D類	(能登系)・胎土に海綿骨針が混じる			

第12図 富山城跡土師器皿器形分類(堀内分類)



さて、北陸とはやや距離を置いた観のある「江戸」の15世紀後半～17世紀は、東国の一地域から幕藩体制における政治・軍事・経済の中心地として成長した過渡期(P127)にあたる。16世紀の京都系手づくねかわらけは、東京都葛飾区の葛西城址や八王子市の八王子城跡などでみられ、小田原北条氏などの地域勢力それぞれに固有のかわらけが存在しうる可能性が指摘されている。17世紀にはいり圧倒的多数を占めるロクロ成形の江戸在地系土器が成立していく中、東京大学本郷構内の“池遺構”で寛永6年(1629)を下限とする大量の手づくねかわらけが出土する。これらは加賀藩本郷邸での御成との関連から、京都系よりむしろ金沢とのつながりが考えられる(P132)が、こうした京都系土器の格の高い場における拠点的搬入とする様相は、江戸と北陸では大きな差異がみられるようである。

4. 陶磁器様相

陶磁器との共伴関係をみていくうえで、森島は、①遺構の切り合いが著しい場合は必然的に古い遺構の遺物が混じる。②陶磁器類の大半は、生産地で想定される時期よりも新しい土師器皿と共伴するため混入遺物か使用時に共存していたものかの判別が難しい。③そのため、日常雑器の年代観が固まっていない地域において、陶磁器などの広域流通品のみから年代を決定することの孕む危険性を指摘(P10・13)する。また水本は、江戸における17世紀前半の陶磁器・土器の需要様相をグループ分けし、国産陶器や肥前磁器についても地域性や階層性等からみた生産・流通構造の複層的展開を予想(P134・135)するが、ここでは17世紀前後以降に新たな広域的出土が認められ、比較的器形・年代の推移が追いやすいと思われる肥前陶磁器の出現時期について各編年基準資料からみていきたい。

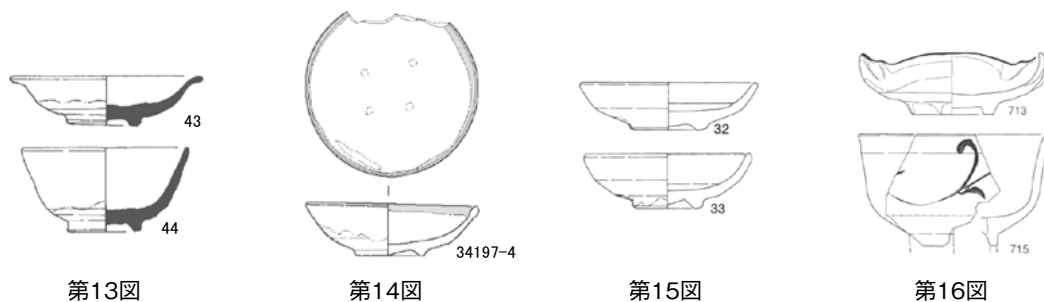
(1) 肥前陶器

京都：「平安京左京北辺三坊四町跡 堀45」 出土品は大半を土師器皿が占める。国産施釉陶器では肥前の灰釉碗・皿類(第13図)がみられ、瀬戸・美濃産の割合がやや多い。磁器類はすべて中国製で肥前は含まれていない。時期はXI期古(1600～)に属する。

越前：「福井城跡 土坑34197下層」 上層は攪乱により時期が多少混じりあう。土師器皿は京都系Ba1・Bb1類が出土。胎土目をもつ肥前灰釉皿(第14図)が共伴する。17世紀前葉(福井城I期)に収まる資料とされる。

加賀：「小松城跡(第1次) SK28」 平底で体部の器壁の厚い京都系土師器皿B類、目跡のみられない肥前灰釉皿(第15図)、瀬戸・美濃皿、見込に印花文をもつ大窯期の越中瀬戸皿などが共伴する。遺構の時期は、寛永17年(1640)に加賀藩三代藩主前田利常が隠居城とする以前の、前田氏が城代を置いていた時期(1600～)に該当する。

能登：「小島西遺跡 B区SD32」 京都系土師器皿B類は総じて器壁が厚手化しており口縁端部の造りは形骸化しているが、京都系の造りは意識されている。絵唐津の碗・皿(第16図)に見込に櫛描波状文のはいる大窯期の越中瀬戸折縁皿が共伴する。17世紀前葉の資料とする。



金沢：「金沢城跡 内堀橋北詰下層SX01」 土師器皿は京都系B類が主体を占め、その内の能登産の製品は1590年代と想定した前代の資料と比べると口縁端部の造り等で後出的とみられる。中国磁器青花皿、越中瀬戸大窯ソギ皿、肥前陶器鉄絵皿(第17図)等が共伴し、下限を1600年代と考える。

越中：「富山城跡 三ノ丸(レガートスクエア2区)堀2-SD481」 大型の堀で、慶長期の富山城外堀の開削(1605)に伴い埋め立てたと考える。土師器皿在地系A類、京都系C1・C3類、能登系D類が出土する。瀬戸・美濃、越中瀬戸等が共伴し、肥前では皿、壺、鉢等が報告されているがやや精査が必要か。ここでは鉄釉・灰釉皿(第18図)を取り上げた。遺構の下限は17世紀初頭とされる。

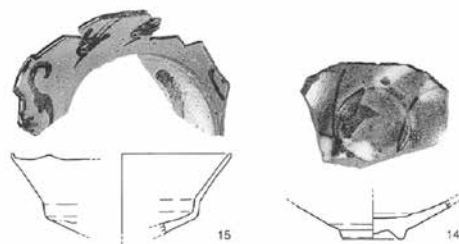
江戸：「東京駅八重洲北口遺跡 1264号遺構」 かわらけは江戸在地系成立以前で、ロクロの回転は左右双方がみられる。京都系の手づくねはない。景德鎮磁器と瀬戸・美濃陶器を主体とする中で絵唐津皿類(第19図)等が登場する。八重洲1期の生活面との関連から1610年代頃を下限⁽⁹⁾とする。



第17図



第18図



第19図

肥前におけるやきもの生産は、1580年代頃、佐賀藩唐津市(旧北波多村)の岸嶽古窯跡群ではじまったとみられ、その後時をおかずに肥前一带(佐賀藩・大村藩・平戸藩)に広がる。生産地編年のⅠ期(1580年～1610年代)の主な特徴としては、鉄絵装飾による「絵唐津」製品、皿の重ね焼きに「胎土目」使用、叩き成形による瓶・壺・甕等の内面青海波状の当て具痕等があげられる⁽¹⁰⁾。

今回第13～19図で抽出した出現期の肥前陶器は、おおむねこのⅠ期の製品に該当すると思われる、器種的には碗・皿類が大半を占める。また、出現時期についてはある程度の幅はあるものの、各地域とも確実に16世紀代に上がるものはみられず、ここでは17世紀前葉を下限とする17世紀初頭を想定しておきたい。

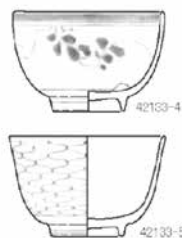
(2) 肥前磁器

越前：「福井城跡 旧河川42133」 出土土師器皿は京都系Ba1・2類、Bb1・2類に分類できる。また、Ba2類に粘土で持ち手を付けた灯明受皿が出現する。陶磁器類は大量に出土し、肥前染付碗(第20図)の他、肥前陶器、瀬戸・美濃、越前等が含まれる。遺構は寛文9年(1669)の大火後に焼土を含む土砂で埋められており、該期を下限とする。

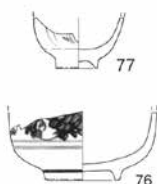
加賀：「大川遺跡 SX01」 外底部に板目状の圧痕が観察される土師器皿C類(滝川C2 I 1b類に類似か)が出土し、越前、肥前染付碗・小坏(第21図)等が共伴する。加賀藩三代藩主前田利常が、小松城を隠居城とした寛永17年(1640)以降の小松城下町整備に伴う遺構群とされる。

金沢：「金沢城跡 石川門前土橋盛土3」 底部外面に板目状圧痕をもつ土師器皿C2 I 1b類が主体となり、前代まで主体を占めたC2 I 1a類はごく少数となる。また、小型品のC2 I 2類も少量みられる。中国磁器青花、肥前磁器染付筒碗(第22図)、肥前陶器砂目皿、越中瀬戸向付等が共伴する。金沢城跡のⅥ段階(1640)にあたり、「広坂遺跡(1丁目) II SK2040(第23図)・SK2025」等も該当する。この段階から明確に肥前磁器が伴出するとともに、瀬戸・美濃が少なくなる。

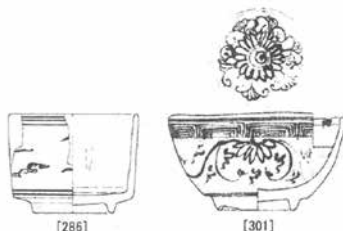
江戸：「三番町遺跡 86号遺構」 厚手と薄手のかかわりが出土する。厚手については左回転、薄手のものは左右の回転がみられるが、他の遺跡でも17世紀前葉頃まではこうした混在が認められる。出土磁器は景德鎮青花碗、肥前染付碗(第24図)、陶器では瀬戸・美濃の白天目碗等が共伴する。本遺構に切られる347号遺構は17世紀第2四半期以降と捉えられ、肥前染付碗を寛永14年(1637)の窯場整理統合前後の資料と判断し、該期の下限を1637年前後⁽¹¹⁾とする。



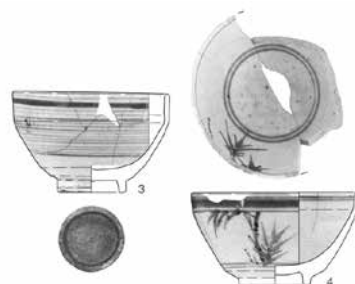
第20図



第21図



第22・23図



第24図

文禄・慶長の役(1592～1598)により九州各地の大名が朝鮮人陶工を多く日本に連れ帰った結果、朝鮮李朝の窯業技術が到来し、この中の磁器生産技術によって、肥前で国内はじめての磁器生産が1610年代頃に開始⁽¹²⁾される。肥前磁器の生産地編年は4期にわけられ、Ⅱ期の1610～1640年代は一般には「初期伊万里」と呼ばれ成形等に朝鮮の技術の名残が見受けられる。また、この中では伊万里・有田地方の窯場整理統合事件(寛永14年(1637))の前後で製品にいくつかの違いがあるため、Ⅱ-1期(1610～1630年代)とⅡ-2期(1630～1650年代)に区分⁽¹³⁾されている。

肥前磁器の出現期にあたっては、報告内容に沿って4地域からの資料を取り上げたが、越前(第20図)が中でも新しい。当該遺構出土の肥前磁器はⅡ期後半からⅢ期(1650～1690年代)前半のものが中心(P31)となり、遺構の年代も寛文9年(1669)の大火を下限とするため出土様相に大きな矛盾はないが、福井城跡ではこれらより古手のⅡ期製品も大量に出土しており、現時点においては今後の良好な一括資料が待たれるところである。その他の第21～24図については地域も離れた加賀・金沢と江戸からの事例であるが、おおよそⅡ期に収まる資料であり、その出現時期も1630年代後半～1640年前後と想定される。ただ、こうした食器様相には地域性・階層性等が反映され、共伴する中国磁器や肥前陶器、瀬戸・美濃等の動向とも強い関わりをもつため、組成全体の中での位置づけが重要となる。

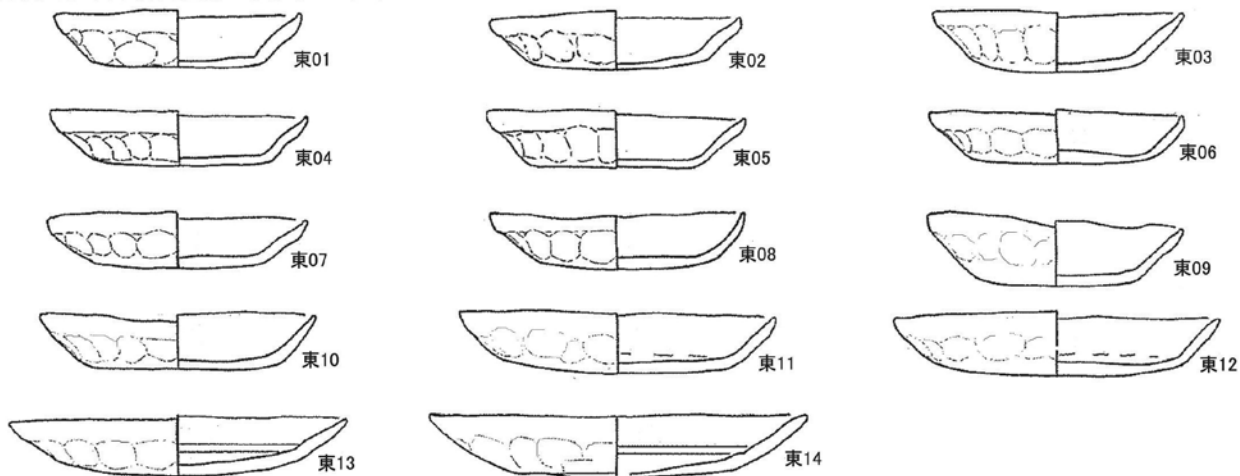
5. 土器胎土分析

今回の研究集会では各地域からの報告とともに、長佐古主導のもと、土師器皿の生産地推定に向けた非破壊胎土分析の有効性についても取り上げ(P163～172)ている。分析のきっかけとなったのは、東京大学本郷構内遺跡出土の手づくねかわらけと金沢城下出土の土師器皿との類似性⁽¹⁴⁾であり、加賀藩本郷邸における寛永6年(1629)の御成に伴う“池遺構”出土の手づくねかわらけが、国元金沢からの搬入品かどうかを科学分析で検証したのが今回の試みである。分析にあたっては、破壊分析が試料供与のネックとなる可能性が懸念されたため、考古資料としての形状が保たれる非破壊分析を選択した。ただし、分析精度が破壊分析より落ち、法量や形状等によっては資料(第27図・P165)や測定元素に制限が出るため、今後の土器胎土における非破壊分析の有効性を探る基礎情報の収集もあわせて行われた。

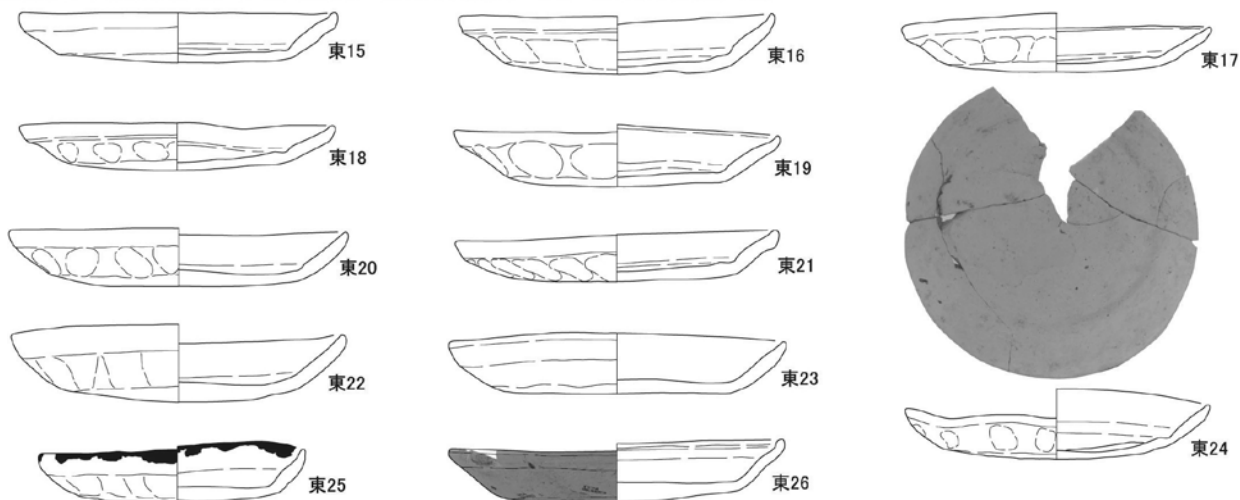
分析対象とした主な資料は、東京大学本郷構内遺跡35点(第25図・P164、手づくね27点・金箔1点・ロクロ成形7点)、金沢城跡15点(第26図・P165)、金沢城下町遺跡21点(第27図・P165)である⁽¹⁵⁾。第25図上・中段の東大の手づくねかわらけは、滝川分類C2 I 1a類もしくはC2 I 1b類に相当するとされ、東01～14は寛永6年の御成資料、SK4553(東25・26)では底部に「寛十四(1637)/丑九月廿日/申時/三度入」と刻書されたロクロかわらけが共伴することなど⁽¹⁶⁾から、1620～1630年代の資料群と想定される。また、比較対象とした第26・27図の金沢側の土師器皿についても、滝川分類C2 I 1a類・C2 I 1b類に比定され、推定帰属年代も東大と同様の1620～1630年代とされている。分析はエネルギー分散型元素分析装置(EDS)を用いた元素組成の定量分析で、7元素の定量を試みた。結果の詳細はここでは省くが、東大の手づくねかわらけは、二酸化珪素と酸化アルミニウム含有率及び酸化鉄と酸化チタン含有率の二元分布、測定7元素を用いたクラスター分析等においても、すべての値が金沢産領域にプロットされるなど、分析値からみる限り金沢産を疑う証拠はみあたらない(P169)。

御成という当時最上の武家儀礼の場で、江戸でも容易に入手可能なかわらけをあえて多くの手間と経費をかけて国元から大量(数万単位か)に運んだという事実は、当時の金沢産土師器皿のもつ特殊性と加賀前田家の地元産に対する自負心を考えるうえで興味深い。また、今回こうして非破壊での機器分析の有効性について一定の方向性が得られたことにより、今後より工夫・改良を加えていけば、非破壊による胎土分析の可能性はさらに広がっていくことが期待(P171)されよう。

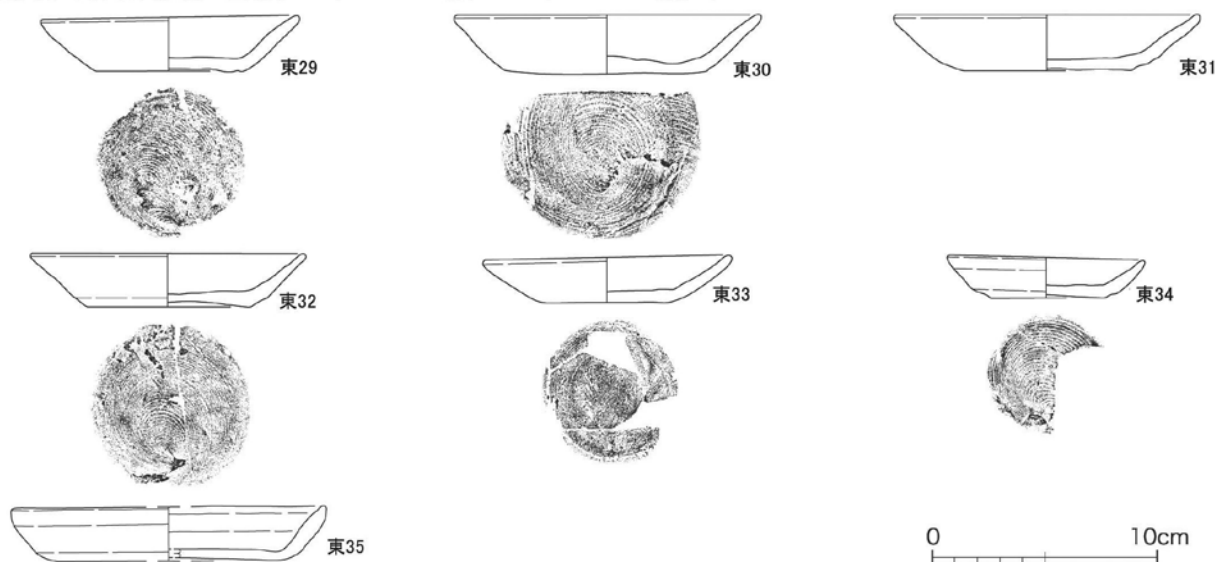
東京大学本郷構内遺跡 中診(HHC) 池



東京大学本郷構内遺跡 医研(HIKN) SK4513(東15~24) SK4553(東25・26)



東京大学本郷構内遺跡 医研(HIKN) SX2715(東29~34) SD1601(東35)



第25図 東京大学本郷構内遺跡出土土師器皿

金沢城 五十間長屋台下層 VI面SD01 (1620年代)

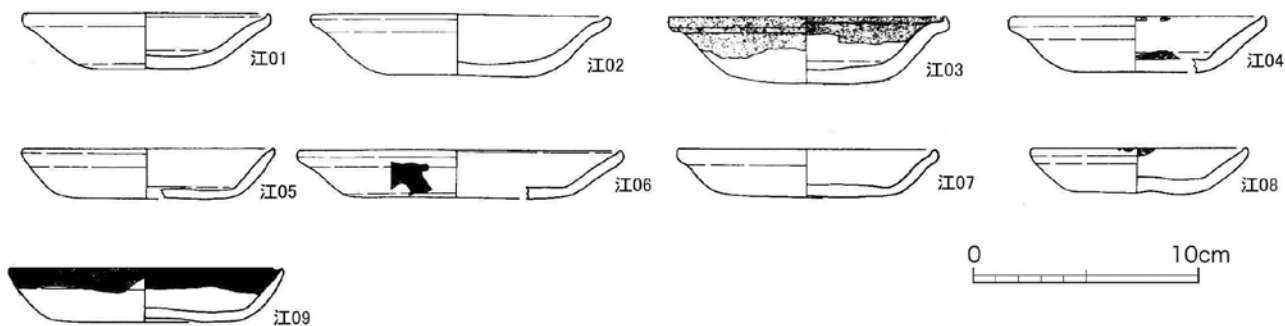
／ 金01～04; C2 I 1a類

※ 金沢城本丸付段(2004-1地点)SK11 (1630年代) 全て未実測

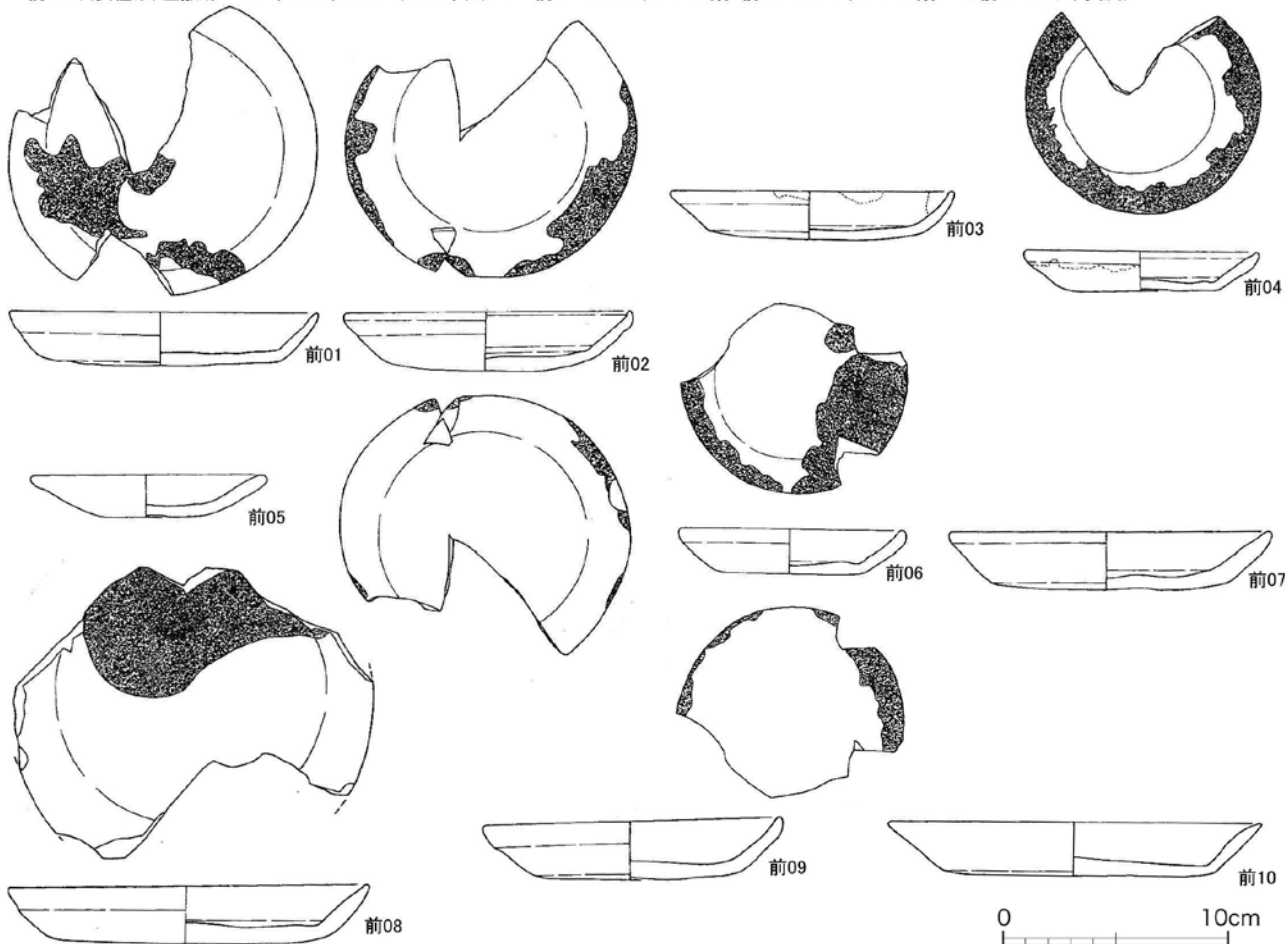
／ 金05～10; C2 I 1a類 金11～15; C2 I 1b類



特別名勝 兼六園(江戸町推定地) 第3遺構面(1620年代) ／ 江01～江04; II類 江05～江09; C2 I 1a類



前田氏(長種系)屋敷跡 SX12, SX05, SX03 (1630年代) ／ 前01～05・11; C2 I 1a類 前06～10・12; C2 I 1b類 ※前11・12は未実測



第26・27図 金沢城跡・金沢城下町遺跡出土土師器皿

6. おわりに

会場をはじめ県埋蔵文化財センターから県立歴史博物館に移して開催された平成最後の研究集会では、北陸三県の土師器皿(かわらけ)愛好者をはじめとして、県内外から多くの方々に参加いただき盛況のうちに幕を閉じることができた。事務局としても編年附図(A2版・4枚)のついた最新成果をまとめることができ、関係各位に感謝申し上げる次第であるが、当日“討論”の進行を担当した筆者としては、あまりにも時間が足りず、みなさんの貴重な疑問や関心が宙に浮いたまま終了してしまった想いに何とか行き場を求めたのが今回の拙文である。

当日の発表内容及び資料集の報告内容は多岐にわたり、土師器皿分類・編年基準資料・共伴陶磁器から導き出された編年案に基づき、各地における組成・系譜・画期等が検討されている。ここではその中から、京都産土師器皿の様相、各地京都系土師器皿の分類と変遷、肥前陶磁器の出現期、そして生産地推定に向けた土器胎土分析について取り上げ概観し、若干の解説を試みた。各変遷の画期において北陸の共通項をやや独善的に探るとすれば、土師器皿の様相では在地系から京都系への集約化が進む16世紀前半と、中世に系譜をもつ京都系が姿を消し次世代タイプに繋がる17世紀前半が一つの画期として想定されようか。また、17世紀前半については肥前陶磁器の出現・定着とも機を一にしており、両者の有機的な結びつきの有無に関しては今後の課題であるが、今回の研究集会のテーマにある“北陸にみる近世成立期”を考えるうえでは欠かすことのできない大画期として捉えておきたい。

なお、拙文内での引用等に際しては報告者の敬称を略させていただいた。また、その解釈等について誤解や齟齬があれば、すべて筆者の責任である。

【註・引用参考文献】

- (1) (財)石川県埋蔵文化財センター 2010 『近世日本海域の陶磁器流通—肥前陶磁から探る—』平成22年度環日本海文化交流史調査研究集会発表要旨・資料集
- (2) WWW.ishikawa-maibun.jp (刊行物/資料⇒現説・講座等資料⇒平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会資料集)
- (3) 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所
- (4) 出現期の様相として森島からは、加賀の「勅使館跡D2-2土坑のB類大皿(P99)：京都大学白河北殿北辺の調査SD24出土資料(15世紀後半)に類似」は15世紀中葉、越中の「富山城跡三ノ丸レガートスクエア2-SD70のC1類大皿(P63)：青磁碗等共伴(～15世紀中頃)」は15世紀後半以降の印象を受けるとの指摘もあった。
- (5) 伊野近富 1997 「1.土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (6) 中井淳史 2011 『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
- (7)・(8) 阿部 来 2018 「越前における15～16世紀中葉の土器皿」『石川県埋蔵文化財情報 第39号』(公財)石川県埋蔵文化財センター
- (9)・(11) 当日配付の水本追加編年案では、これらより古い一群も示されているが、ここでは当日資料集の基準案に拠った。
- (10)・(12) 中野雄二 2010 「近世肥前窯業史—16世紀末～18世紀—」『近世日本海域の陶磁器流通—肥前陶磁から探る—』(財)石川県埋蔵文化財センター
- (13) 大橋康二 2000 「I 九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- (14) 堀内秀樹 2000 「史料から見た御成と池遺構出土資料」『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合研究博物館
- (15) 胎土分析資料の選定は、金沢城跡分は滝川重徳、金沢城下町遺跡分は岩瀬由美が行った。
- (16) 東京大学埋蔵文化財調査室 2019 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点 報告編』